

「世外桃源」の歲月…日文研での研究生生活の思い出

張 翔

（注…「世外桃源」とは中国晋代陶淵明（三六五？～四二七年）の『桃花源記』で出た政治的世界から離れた平和的、ユートピア的、神秘的場所である。）

『封建郡県論を巡る思想連環―東アジアにおける他国認識と自国改革』という研究テーマが認可され、共同研究の代表者として二〇〇三年八月から丸一年間滞在し、また二〇一三年一月から半年間戻ることができた。その間、故園田英弘教授、伊東貴之教授をはじめ、各国の学者の皆様から様々な貴重な助言をいただいたのは言うまでもなく、スタッフの皆様には確実なサポートをしていただいたことは、一生忘れられない記憶である。今回、日文研での研究生生活を通じて、国際共同研究について考えたことをこの場を借りて述べさせていただく。

一、

日文研に来る前、東京大学や京都大学の客員研究員として滞在したことがある。いずれも世界屈指のすばらしい研究、教育機関に違いないが、正直に言うと、その中にいる外国人研究者がある意味で暫時的で異質な存在に過ぎず、日文研のように外国人の研究者が常時的、構造的な存在という感じがどうも薄いような気がする。というのは、日文研の学者やスタッフが、面

倒を顧みず一人で多数の外国人研究者を相手にする場合も時々見受けたからである。

それよりも重要なのは、そこでの研究が独善的、一方的、また自己満足型ではなく、オープンで自由、そして交互型だということではなからうか。一つ例を挙げると、ある日文研の共同研究会で川勝平太教授は今まで日本の近代化を「脱亜」（もちろん経済的・物産的自立という意味で）の成功という意味で捉えられていたが、韓国の李御寧教授や皆様との議論の中で、きっぱりと「帰亜」や「返亜」の重要性を再確認し、受け入れられるようになった。これほど印象的であった。すなわち、日本人研究者と外国人研究者の間の対話により、それぞれの学問の関心や指向などが常に流動的、発展的で、必要に応じて調整や修正もできるものではないか、と推測できる。自由な意見の交換はその根底にある。

日文研のメルिटは様々な機会に各国の学者たちと議論ができるということである。日本の学者ばかりでなく欧米やアジアなどの学者たちとも日本語で話し合っていたのはある意味で奇妙な光景ではないだろうか。その場合、日本文化の研究はメインテーマに違いないが、それと同時に、各国の文化、生活や研究体制などにも話が広まっていく。日本文化の研究だけでなく、日本文化研究を通じて諸文化の交流や対話も実の中で含まれている。ふだん学術シンポジウムで出会った外国人の学者との交流は時間の制約で、必ずしも日文研での外国人学者との交流ほど深くも長くもない。というのは、互いに時間をかけて質問したり答えたりする機会も日文研にいたる間多くあり、日文研で友人になりその後も続いて交流することもよくある。

二、

日文研は一つの国際的日本学のセンターでありながら、京都市民にも日文研周りの住民にも

好意的に受け入れられているのではないかと思う。二〇一三年早春、日文研フォーラムの枠で京都市内ハートピア京都の大会議室で市民の皆様に対して「中日文化異同論の推移…近代以降の日本と欧米の学界を中心に」というスピーチをする運びとなり、伊東貴之教授の司会で穏やかに行われた。少し時間がオーバーしたにも関わらず、市民の皆様が興味津々（たぶんそうだろう）で聞いてくださり、スピーチの後、日文研のスタッフを通じて聴衆から多くの質問や励ましの言葉をいただいた。驚き感心したのは、最近中日関係は必ずしもよろしくないが、好意的で、実にいろいろな意見を述べられており、かなり自由で多面的なものであったことだ。

もう一つ今も忘れられない体験がある。ある日、桂駅西口へ行くバスを待っていたところ、一人の年配の女性の方から、涙を流している五、六歳の女の子を指さして「お願い、この子は桂駅前のある英語塾に行きたいが、お母さんが突然いなくなり、授業の時間に間に合わないのを恐れて泣いているから、一緒に行ってあげてください」と言われて驚いた。向こうは僕が外国人だと知っているかどうか分からないが、初めて出会ったものであっても、多分日文研の人だから安心して頼めると思われるかもしれない。なぜなら、昼間に日本人の男性が外へ出かけるのは少ないのではなからうか。しかし、まったく知らない人に小さい女の子を頼むのは、相当信頼度が高い社会でなければ、できないはずだ。日本の安全性が高いのを認めたいうで、日文研という存在が地元の人々からすっかり馴染まれているのではないかとも思う。

実は一度その出来事について旧知のある大学教授に面白げに語ったところ、「気をつけてよ、もし誘拐犯と思われたら大変だよ」と注意された。その先生は横浜の大学で教え、住居も横浜である。横浜では人の往来も多く、多分こういうことはまず考えられないだろう。しかし、京都の日文研は、まさに「世外桃源」といったところで、日文研の皆様と外国人研究員たちが地

元の住民と互いに和やかに共存している。これはその一つの例とは言えないだろうか。

三、

実を申し上げると、最初に来た際、日文研がイエズス会の現代日本版ではないか、とひそかに思っていた。しかし、少し時間がたつと、それは誤解・誤認だろうと悟った。確かに日本人の研究者と外国人の研究者により、日本文化についての共同研究が行われているが、日文研は日本文化を輸出したり、広めたりするという目的より、日本文化の各分野の研究について、互いに議論したり、ほかの文化と比較したり、意見交換したりすることを通じて、その真相・真髓・真価を問おうとする純粋な学術活動をサポートすることを主な目的としているように思われたからである。そして前述の通り、日本文化の研究ばかりでなく、日本文化研究を通じて諸文化の間の交流や対話も実には含まれているのはありがたいことである。

今の日文研は世界中の日本文化の研究に携わる学者の「補給基地」の一つと言える。なぜなら世界各地の研究者がここに来て、さまざまな情報や知識を吸収し、資料を入手しているからである。また、その「交互発信地」の一つとも言える。なぜなら世界各地の研究者が継続的にここで集まり、日本文化研究の成果について、意見交換し、また世界に向かって発信しているからである。そしていつか、世界中の日本文化研究者の一度は必ず訪れるべき「聖地」(の一つ?)になるかもしれない。日文研での日本文化研究がこれから世界にも理解可能な、参考可能な、また世界各地の文化の比較研究にも役に立つものになるよう、切望してやまない。

二〇一七年一月

(復旦大学歴史学系教授)